

7月1日で発生から半年となった能登半島地震。甚大な被害を受けた能登地方の被災

医療最前線 災害に備える

県立中央病院から

〈296〉



三森寛士
看護師



高野一城
副看護部長

者支援のため、山梨県立中央病院の看護師・高野一城さん



Ⅱ副看護部長Ⅱと三森寛士さんはそれぞれ2回にわたり、災害派遣医療チーム（DMAT）の一員として被災地や避難所での活動に尽力した。

能登地震でDMAT参加

避難所入所者筋力低下も

三森さんは震災発生直後の1月2日に出発し、まずは国立病院機構七尾病院（石川県七尾市）で活動した。具体的な被害や物資の備蓄状況など

にも取り組んだ。震災から時間が経過し、筋力が低下した入所者も多かった。横になっているだけでなく積極的に歩くことの大切さを促したという。2回目に訪れた際には、DMAT撤収に向けた準備にも力を入れた。

2人が活動を通じて特に感じたことは、災害への備えの重要性だ。能登半島地震では、石川県内での断水が最大で約11万戸に上った。医療機関自体の損壊は軽微だったが、水が使えずにとどまることが難しい事例も多かったという。

高野さんと三森さんは「近年は大きな災害が頻発している、山梨もいつ見舞われるかわからない。災害時に自分たちの身を守るよう、日頃から話し合うことが大切だ」と話している。

Ⅱ第2、4火曜に掲載します

を確認し、DMAT本部に支援を要請する業務を担った。病院職員の中には帰省のために出勤ができなかったり、自宅が被災していたりする例も多く、現場の負担軽減が急務だったという。

続いて赴いた市立輪島病院（輪島市）では、玄関ロビー

避難所の運営を話し合うDMAT隊員らⅡ金沢市のいしかわ総合スポーツセンター

高野さんは、2次避難前の一時的な受け入れ先として金沢市内に開設された避難所「いしかわ総合スポーツセンター」の運営に携わった。特別養護老人ホームや介護老人保健施設などから介護度3以下の高齢者を受け入れていたサブアリーナで、診療の補助を担った。

センターでは健康チェックや薬剤の管理、入浴介助、避難所内のマニキュア整備など